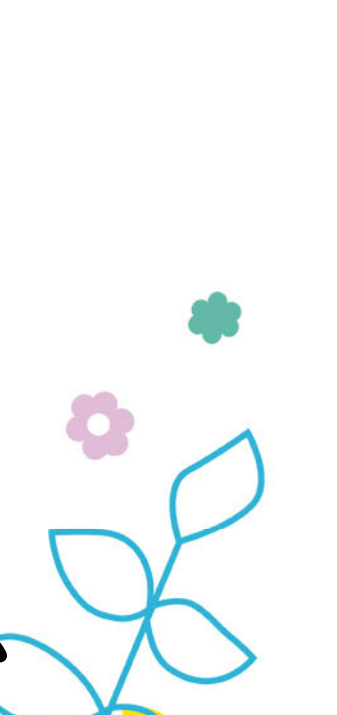




文部科学省 研究開発学校制度・教育課程特例校制度



令和5年度教育研究開発学校フォーラム
研究発表 第2部 講評

2024年1月17日
京都大学 西岡加名恵



<自己紹介>

- 教育方法学(カリキュラム論、教育評価論)。
- パフォーマンス評価(パフォーマンス課題、ルーブリック、ポートフォリオ評価法)を用いたカリキュラム改善について研究している。
- 京都大学大学院教育学研究科E.FORUMの講師と運営を担当(<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>)。
- 日本教育学会近畿地区理事、日本教育方法学会理事、日本カリキュラム学会理事、教育目標・評価学会代表理事など。
- 日本学術会議第26期会員。
- 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ(2009年6月～2010年3月)、育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会委員(2012年12月～2014年3月)、「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)支援事業の今後の方向性等に関する有識者会議」委員(2020年4月～2021年3月)、内閣府 第3期SIP課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」サブ・プログラムディレクター(2023年4月～2024年3月)、文部科学省 教育研究開発企画評価会議協力者(2023年11月～2024年10月)、文部科学省 中央教育審議会 教育課程部会 臨時委員(2023年12月～2025年3月)など。

研究開発学校制度

教育課程の基準の改善に資する実証的資料を得るため、学習指導要領等現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成実施を認め、新しい教育課程、指導方法等について研究開発を行う制度です。
(<https://curriculumdb.mext.go.jp/bc/kk/>)

教育課程（カリキュラム）とは・・・

- 「教えるの計画」？
- 「学べるの履歴」？
- 「**学べるの計画と実践**」！

教師たちが、子どもや青年の成長と発達に必要な文化を選択して組織した全体的な学習経験の計画と実践

(西岡加名恵「教育課程(カリキュラム)とは何か」同編『教育課程』協同出版、2017年、p.8)

◎教育課程編成の構成要件（一部）

構成要件		主な構成要素や論点
基本要件	教育目的・教育目標	ミッション（使命）・価値・理念・校風（エートス）。目的。目標（教材，指導過程と学習形態，学力評価）。
	編成原理，構造	経験主義か系統主義か。スコープ（領域・範囲）やシーケンス（配列・系統性）の設定。単元の配置。
	履修原理	履修主義か修得主義か。年数主義か課程主義か。必修か選択か。
教育条件	時間配分	1 単位時間。教科等への配当日時数。年間の流れ。
	子ども・青年の集団編制	集団の規模。異質化原理か等質化原理か。固定的か，柔軟に変化するか。
	教職員の配置，力量形成	教科担任制か学級担任制か。TT やゲスト・ティーチャーの有無。研修によって，どのような力量を形成するのか。
	教具，施設・設備	教具の種類と数。教室の種類と配置。オープン・スペースの有無。
	学校間の接続	接続校との関係（連携，一貫など）。入試のあり方。

◆学びの「時間」と「空間」を多様化する？

◎総合科学技術・イノベーション会議

総合科学技術・イノベーション会議

【概要】Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ

社会構造の変化の中で新しい価値を生み出すのは「人」
 これからは人と違う特性や興味を持っていることが新しい価値創造・イノベーションの源泉
 「well-being(一人ひとりの多様な幸せ)」を実現できる「創造性」あふれる社会に向けた学びへの転換が必要

社会構造の変化



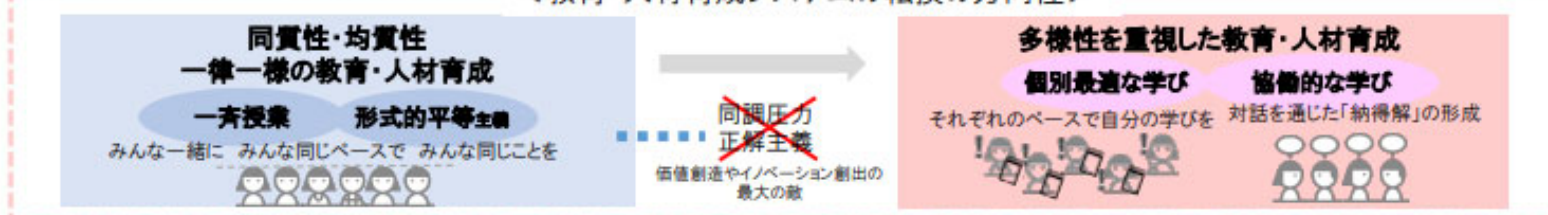
教室の中にある多様性



バイアスのかかる理系の進路選択

性別	男	女
15歳段階の科学的リテラシーの高成績者の割合	40%	37%
高校で理系を選択する割合	27%	16%
修士で理工系を専攻する割合	18%	5%
修士で理工系を専攻する人数	約9.4万人	約2.6万人
修士で理工系を専攻する人数	約3.5万人	約0.7万人

<教育・人材育成システムの転換の方向性>



政策1 子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化

- 教育課程の在り方（教育内容の重点化、標準授業時数など教育課程編成の弾力化）の見直し（文）
- サイエンス分野の博士やプログラミング専門家が教壇に立てよう教員免許制度改革（文）
- 教職員の配置や勤務の在り方の見直し（文）
- 困難さに直面している子供たちの状況に応じた多様な学びの場の確保（文）
- 探究力な学びの成果などを図るためのレポートやプレゼンなどの評価手法の開発（内・文・経）
- 「教育データ活用ロードマップ」に基づく施策の推進（デジ・文・総・経）
- デジタル化を踏まえた国・地方・家庭の教育支出の在り方の検討（文・経）
- 子供や学びの多様化に柔軟に対応できる学校環境への転換（文）

政策2 探究・STEAM教育を社会全体で支えるエコシステムの確立

- 【探究・STEAM教育の充実】
- 高専並の小中学校のSTEAM拠点化（文）
- 探究・STEAMの専門人材の配置に向けた高校の指導体制の充実（文）
- 大学入試における探究的な学びの成果の評価
- 企業や大学、研究機関等と学校をつなぐプラットフォームの構築（文・内・経・デジ）
- 企業の次世代育成投資に対する市場評価の仕組み（経・内・文）
- 【特定の分野で特異な才能のある子供が直面する困難さを除去】
- 学校外プログラムに参加できる教育課程の特例や個別性の高い指導計画の策定（文）
- 高専、SSH、大学、企業等での特異な才能のある子供の受け入れ（文・内・経）
- 特異な才能のある生徒を積極的に受け入れる大学入試の改善（文・内）

政策3 文理分断からの脱却・理数系の学びに関するジェンダーギャップの解消

- ジェンダーバイアスの排除のための社会的ムーブメントの醸成、ロールモデルの発信（内・文・経）
- 高校段階の早期の文理分断からの脱却・高校普通科改革（文）
- 文理分断からの脱却のための大学入試の改善（文）
- ダブルメジャーやバランスの取れた文理選択科目等による大学等における文理分断からの脱却（内閣官房教育未来創造会議担当室・文）
- 学部や修士・博士課程の再編・拡充（内閣官房教育未来創造会議担当室・文）
- 女性が理系を選択しない要因の大規模調査の実施（内・文）

実現に向けた3本の政策・46の施策

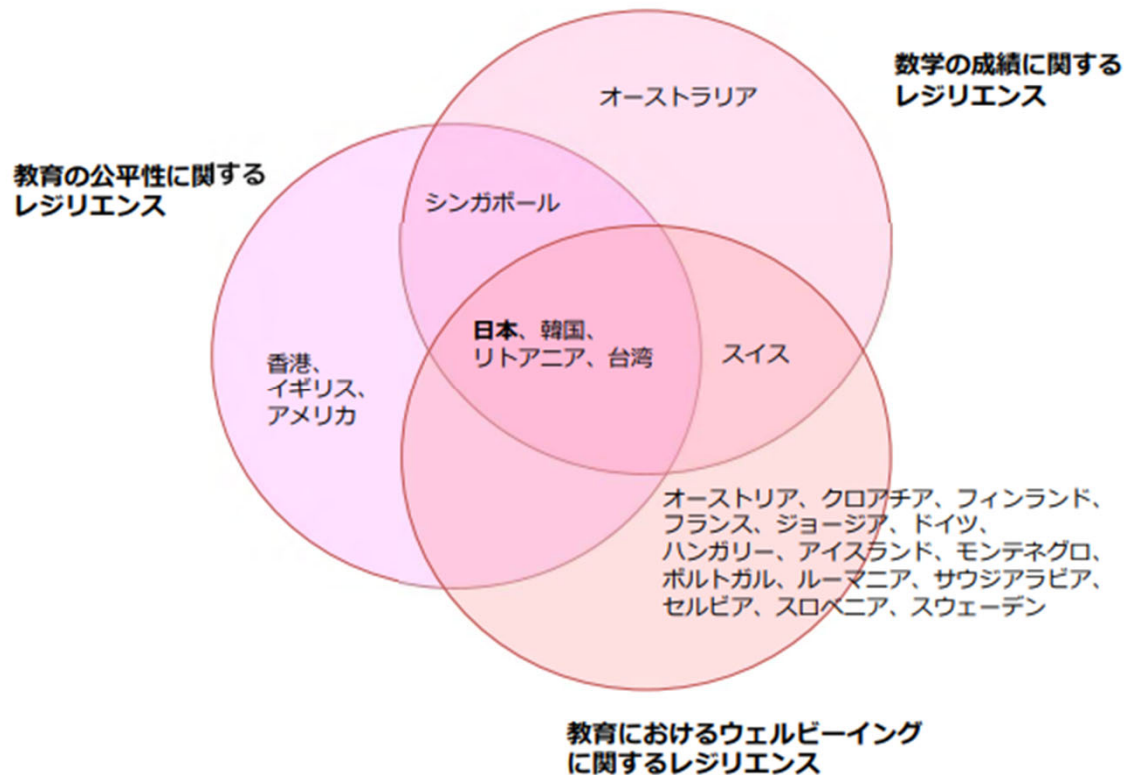
◆日本の学校の状況

◎PISA2022のポイント

(5) 新型コロナウイルス感染症の影響～2018-2022年における「レジリエントな」国・地域～

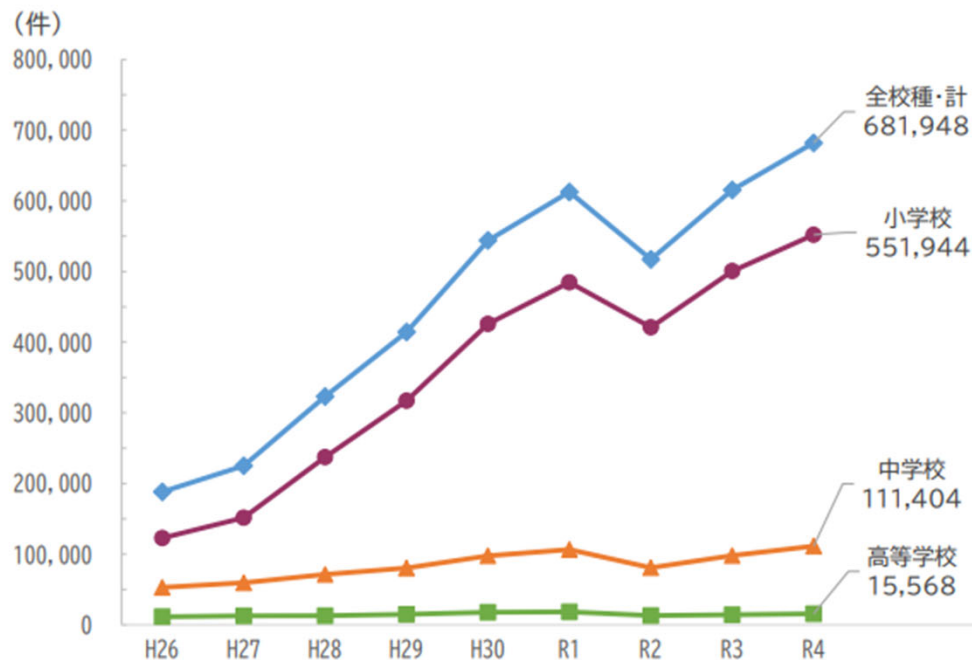
「レジリエントな」国・地域

- OECDは、①数学の成績、②教育におけるウェルビーイング、③教育の公平性の三つの側面について、2018年調査から2022年調査にかけての変化に着目し、その結果から「レジリエントな」国・地域を分析。
- PISA2022に参加した81の国・地域のうち、この3つの側面全てにおいて安定又は向上が見られた国・地域は、日本、韓国、リトアニア、台湾のみであり、OECDは、これらの国・地域を「レジリエントな」国・地域としている。

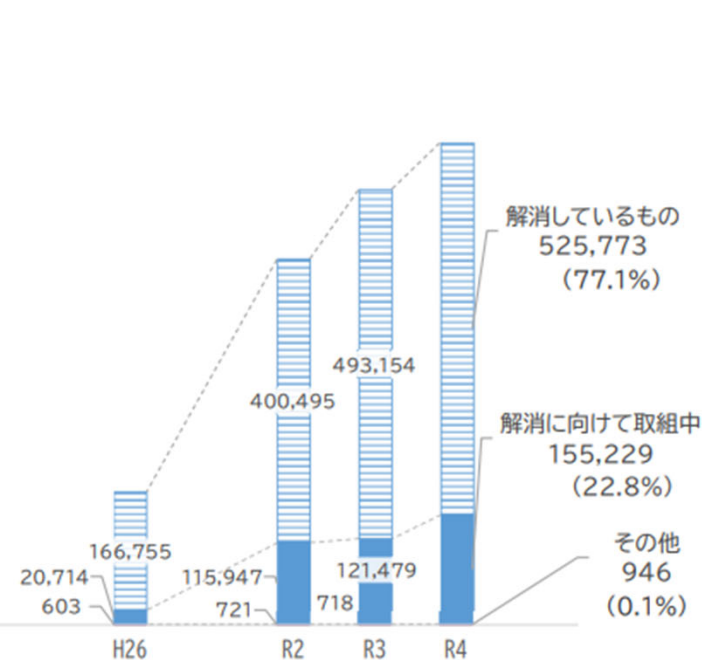


いじめの状況について

いじめの認知件数の推移



いじめの解消状況の推移(各年度末時点)



年度	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
小学校	122,734 18.6	151,692 23.2	237,256 36.5	317,121 49.1	425,844 66.0	484,545 75.8	420,897 66.5	500,562 79.9	551,944 89.1
中学校	52,971 15.0	59,502 17.1	71,309 20.8	80,424 24.0	97,704 29.8	106,524 32.8	80,877 24.9	97,937 30.0	111,404 34.3
高等学校	11,404 3.2	12,664 3.6	12,874 3.7	14,789 4.3	17,709 5.2	18,352 5.4	13,126 4.0	14,157 4.4	15,568 4.9
特別支援学校	963 7.3	1,274 9.4	1,704 12.4	2,044 14.5	2,676 19.0	3,075 21.7	2,263 15.9	2,695 18.4	3,032 20.7
計	188,072 13.7	225,132 16.5	323,143 23.8	414,378 30.9	543,933 40.9	612,496 46.5	517,163 39.7	615,351 47.7	681,948 53.3

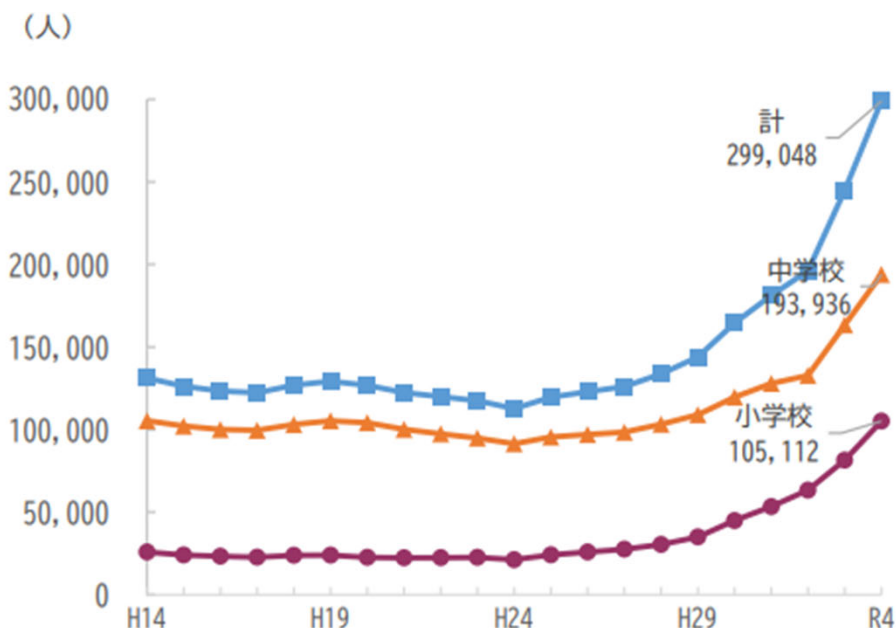
- 小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は**681,948件**(前年度615,351件)であり、前年度に比べ66,597件(10.8%)増加している。
- 児童生徒1,000人当たりの認知件数は**53.3件**(前年度47.7件)である。
- 年度末時点でのいじめの状況について、**解消しているものは525,773件(77.1%)**であった。

※ 上段は認知件数、下段は1,000人当たりの認知件数

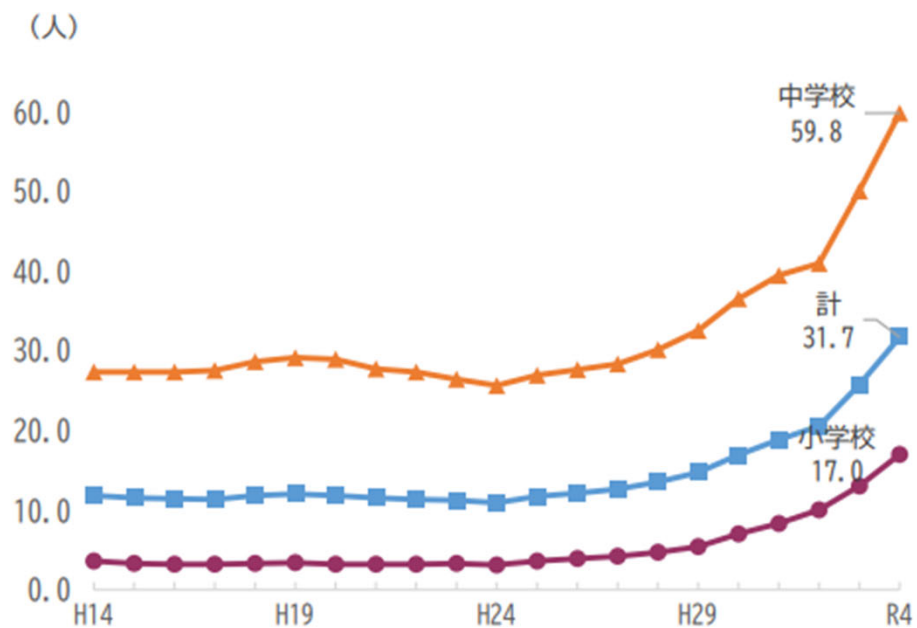
小・中学校における不登校の状況について

- 小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は299,048人(前年度244,940人)であり、児童生徒1,000人当たりの不登校児童生徒数は31.7人(前年度25.7人)。
- 不登校児童生徒数は10年連続で増加し、過去最多となっている。

不登校児童生徒数の推移



不登校児童生徒数の推移 (1,000人当たり不登校児童生徒数)



不登校児童生徒数(上段)と1,000人当たりの不登校児童生徒数(下段)

	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
小学校	25,869	24,077	23,318	22,709	23,825	23,927	22,652	22,327	22,463	22,622	21,243	24,175	25,864	27,583	30,448	35,032	44,841	53,350	63,350	81,498	105,112
	3.6	3.3	3.2	3.2	3.3	3.4	3.2	3.2	3.2	3.3	3.1	3.6	3.9	4.2	4.7	5.4	7.0	8.3	10.0	13.0	17.0
中学校	105,383	102,149	100,040	99,578	103,069	105,328	104,153	100,105	97,428	94,836	91,446	95,442	97,033	98,408	103,235	108,999	119,687	127,922	132,777	163,442	193,936
	27.3	27.3	27.3	27.5	28.6	29.1	28.9	27.7	27.3	26.4	25.6	26.9	27.6	28.3	30.1	32.5	36.5	39.4	40.9	50.0	59.8
計	131,252	126,226	123,358	122,287	126,894	129,255	126,805	122,432	119,891	117,458	112,689	119,617	122,897	125,991	133,683	144,031	164,528	181,272	196,127	244,940	299,048
	11.8	11.5	11.4	11.3	11.8	12.0	11.8	11.5	11.3	11.2	10.9	11.7	12.1	12.6	13.5	14.7	16.9	18.8	20.5	25.7	31.7



◆第2部の発表校

※いずれも1単位時間を45分から40分に変更

※研究課題や背後にある意図はそれぞれ・・・

- 目黒区中目黒小学校 外16校
→指導内容の精選・重点化、
「生み出した時間」127コマ
- 筑波大学附属小学校
←カリキュラム・オーバーロード問題
→各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、
指導内容の構造化、カリキュラム創出
- 東京学芸大学附属世田谷小学校
→Laboratory/Home/Class

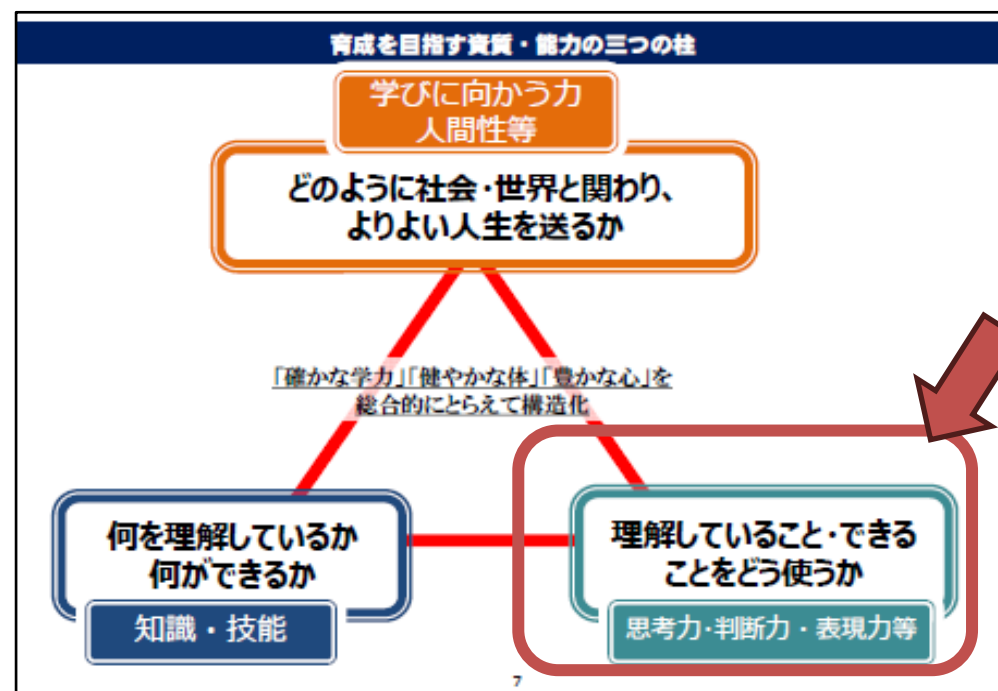
※お尋ねしたいこと

- ① 研究開発の初めの段階で、どうやって先生方の理解を得たのか？
- ② 実際のところ、各教科の授業は豊かになったのか？
（「主体的・対話的で深い学び」）
→むしろ、授業時間を長くしたいという声はなかったのか？
（一律でなくてもいいかも？）
- ③ 社会経済的に恵まれた子どもたちの学校だったから可能だったのではないか？
- ④ 学習指導要領の改訂にあたって、リクエストしたいことは何か？

◎カリキュラム・マネジメント：

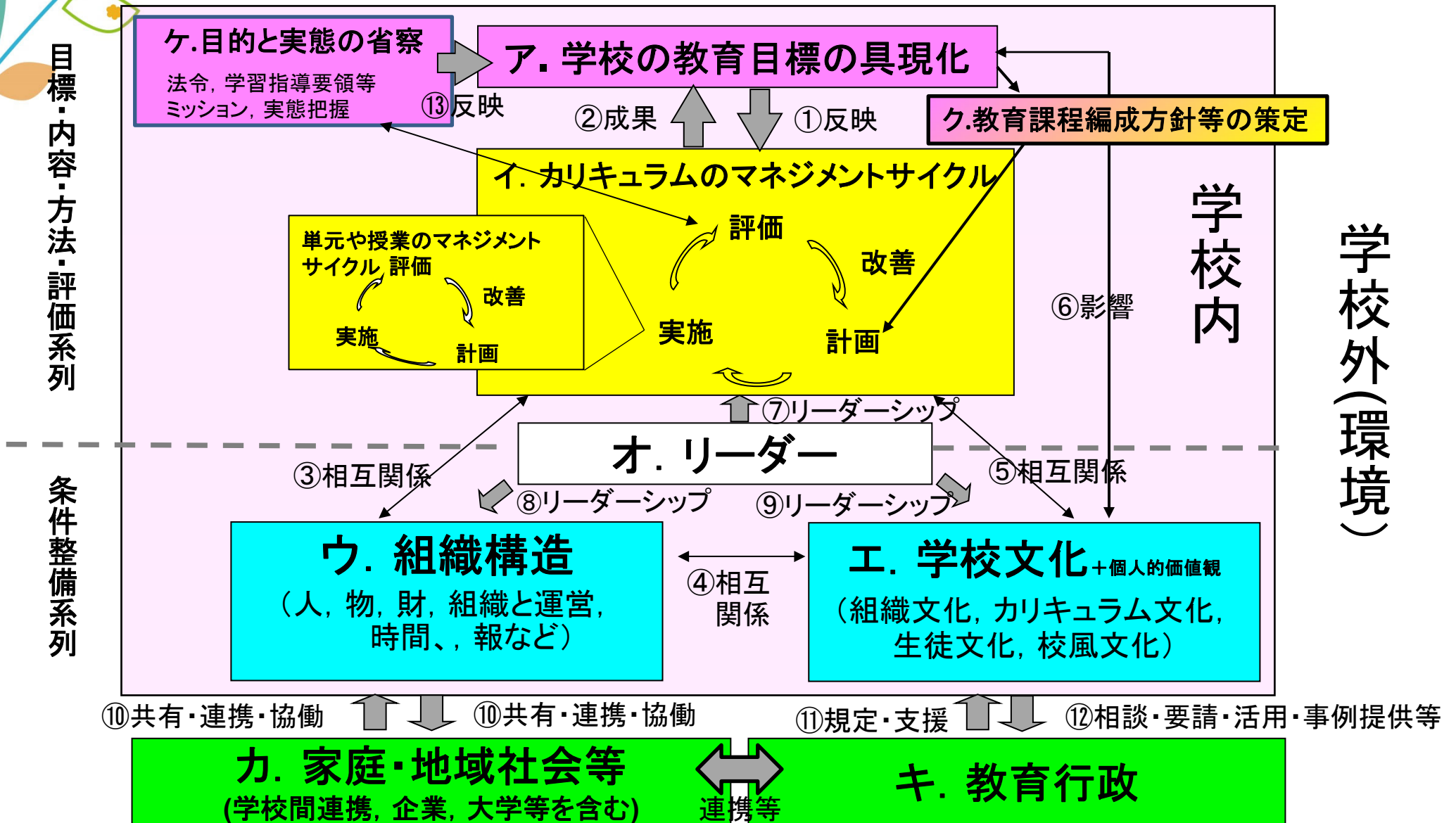
「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営みである。」

（田村知子編著『実践・カリキュラムマネジメント』ぎょうせい、2011年）



（中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016年12月21日）

◎カリキュラムマネジメント・モデル図



(田村知子先生ご提供スライド。)

田村知子『カリキュラムマネジメントの理論と実践』日本標準、2022年、p.49)

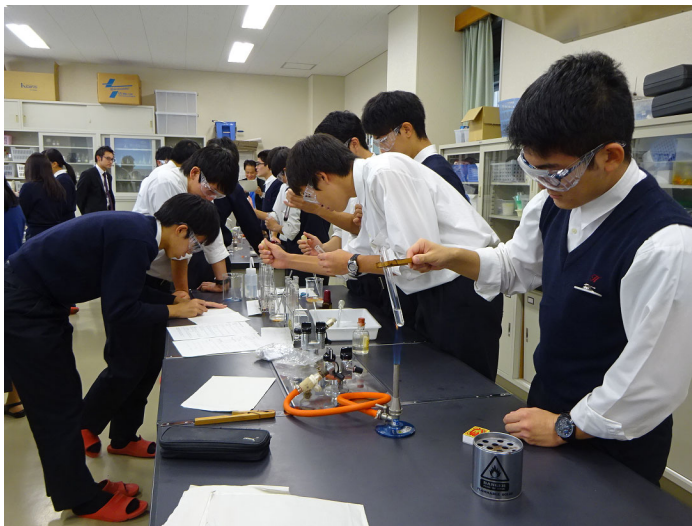
◎教科における「思考力・判断力・表現力」

- 1998年改訂学習指導要領：
教科での「習得」、総合での「探究」

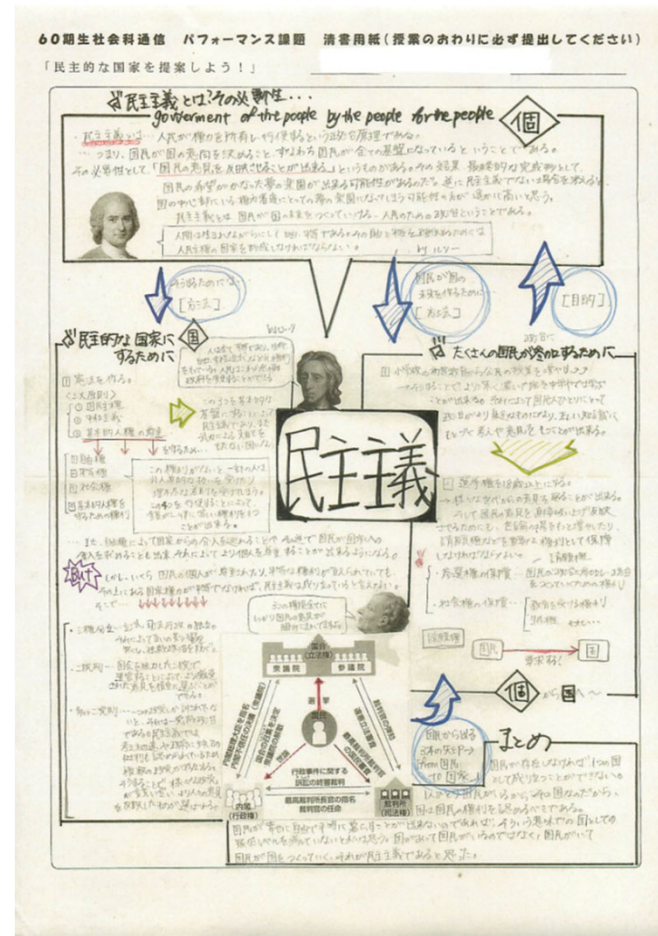
↓2004年 PISAショック

- 2008年改訂学習指導要領：
教科での「習得」と「活用」、総合での「探究」
- 2017年改訂学習指導要領：
「思考力・判断力・表現力」（理解していること、
できることをどう使うか）

「本質的な問い」に
対応する
「深い理解」

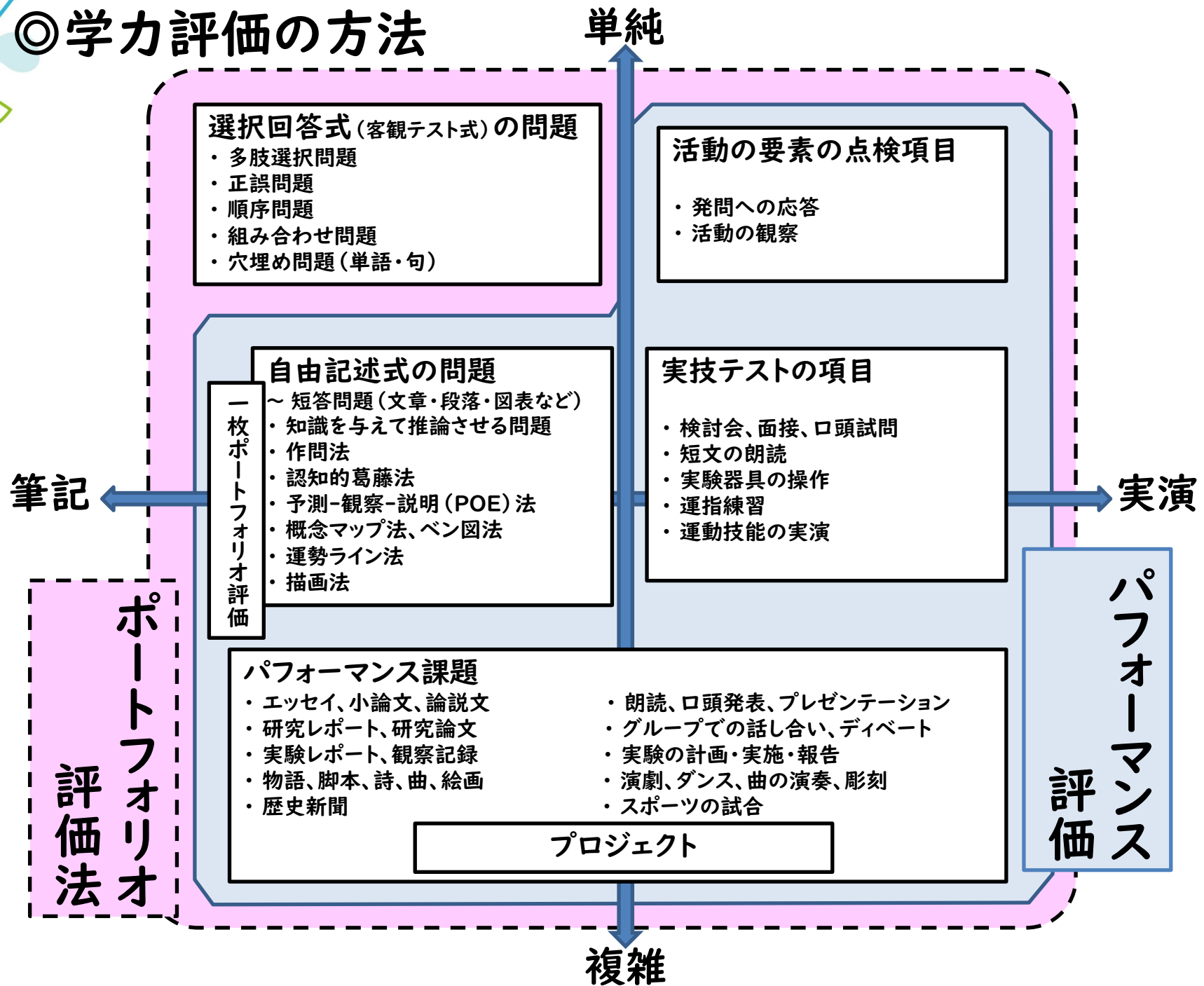


（福本洋二先生の実践）



（三藤あさみ先生の実践）

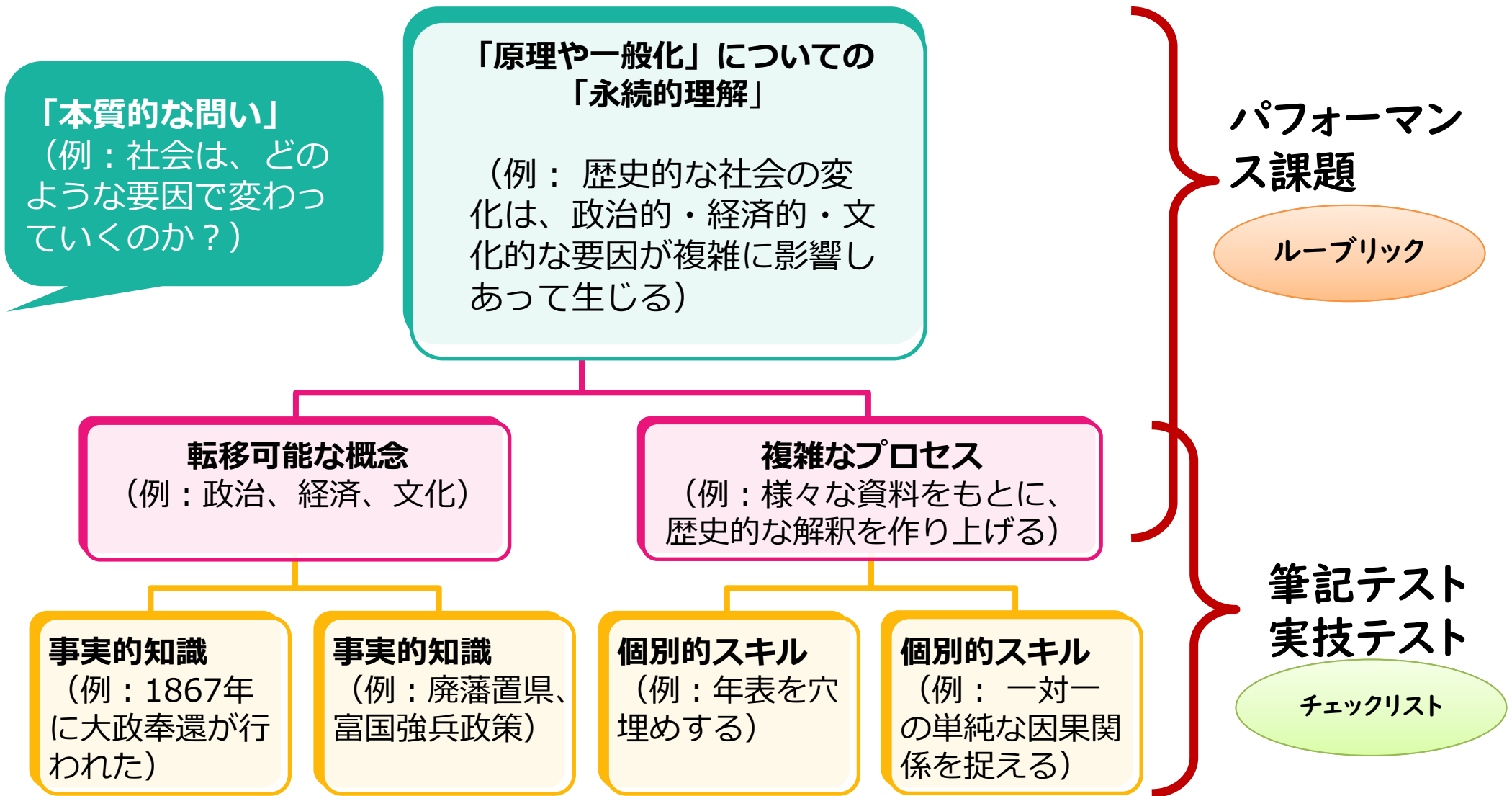
◎学力評価の方法



(西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化、2016年、p.83参照)

◎「知の構造」と評価方法の対応

——中学校・社会科（歴史的分野）の場合



(西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化、2016年、p.83、及び西岡加名恵「教科のカリキュラムづくり」田村知子，村川雅弘，吉富芳正，西岡加名恵編著『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい、2016年、p.99をもとに作成)

目黒区立中目黒小学校外16校 目黒区教育委員会事務局

01 目黒区研究開発の概要

目黒区研究開発学校の特例について

1 単位時間40分= 1 コマ

通常の学校 (1コマ45分)

45分×1,015コマ

研究開発学校 (1コマ40分)

40分×1,015コマ

※第4、5、6学年の場合

5分×1,015コマ

5,075分

生み出した時間

127コマ

【検証①】

1 単位時間を40分としても、指導内容の精選・重点化を図ることで学力を維持・向上できることを示す

【検証②】

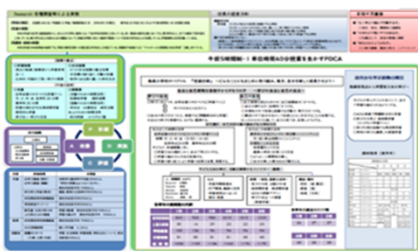
生み出した時間を活用することで、学校独自の創意工夫ある教育課程の編成を一層推進できることを示す



03 検証② 生み出した時間の活用

学校独自の創意工夫ある教育課程を編成することができる要因①

学校グランドデザイン



PDCAを意識した教育課程の編成が
しやすい共通のフォーマット

各学校で
作成・見直し

研究開発学校間
で共有

自校の特色ある取組の明確化

03 検証② 生み出した時間の活用

「生み出した時間」の目黒区研究学校の取組例（生活の質の向上）

目黒区立油面小学校

課題 肢体不自由特別支援学級と通常の学級の児童、他学年の児童同士の交流を充実させたい。

取組 「生み出した時間」多様な他者と関わり合いを深める活動の充実 **55時間**

〈週時程の位置づけ〉

	月	火	水	木	金	
5校時	11:50~12:30	21	22	23	24	25
給食	12:30~13:15	給食・連絡中				
清掃	13:15~13:30	清掃	下校準備	清掃		
昼休み	13:30~13:45	昼休み				
学習準備	13:45~13:50	準備				
関わりを深める時間	13:50~14:10	下校				
6校時	14:15~14:55	26	27	28	29	
帰りの会	14:55~15:05					
最終下校	15:45					

〈関わりを深める時間の様子〉



- 通常の学級と特別支援学級が集会等で関わりをもてるように、午後に「関わりを深める時間」を設定
- 関わりを深める時間（緑色）は特別支援学級と合同

- 「関わりを深める時間」に行う児童集会には、特別支援学級の児童も一緒に参加し、交流を図っている。
- 日常的な交流も実施。（各学年）

03 検証② 生み出した時間の活用

「生み出した時間」の目黒区研究学校の取組例（学びの質の向上）

目黒区立中目黒小学校

課題 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実について研究を進めたい。
（単元内自由進度学習と個人探究の取組の導入）

取組 「生み出した時間①」 教員研修・授業準備等 **35時間**

「生み出した時間②」 個人探究・自学自習の取組 **25時間**

「生み出した時間①」 教員研修・授業準備等
（例）単元内自由進度学習の準備等

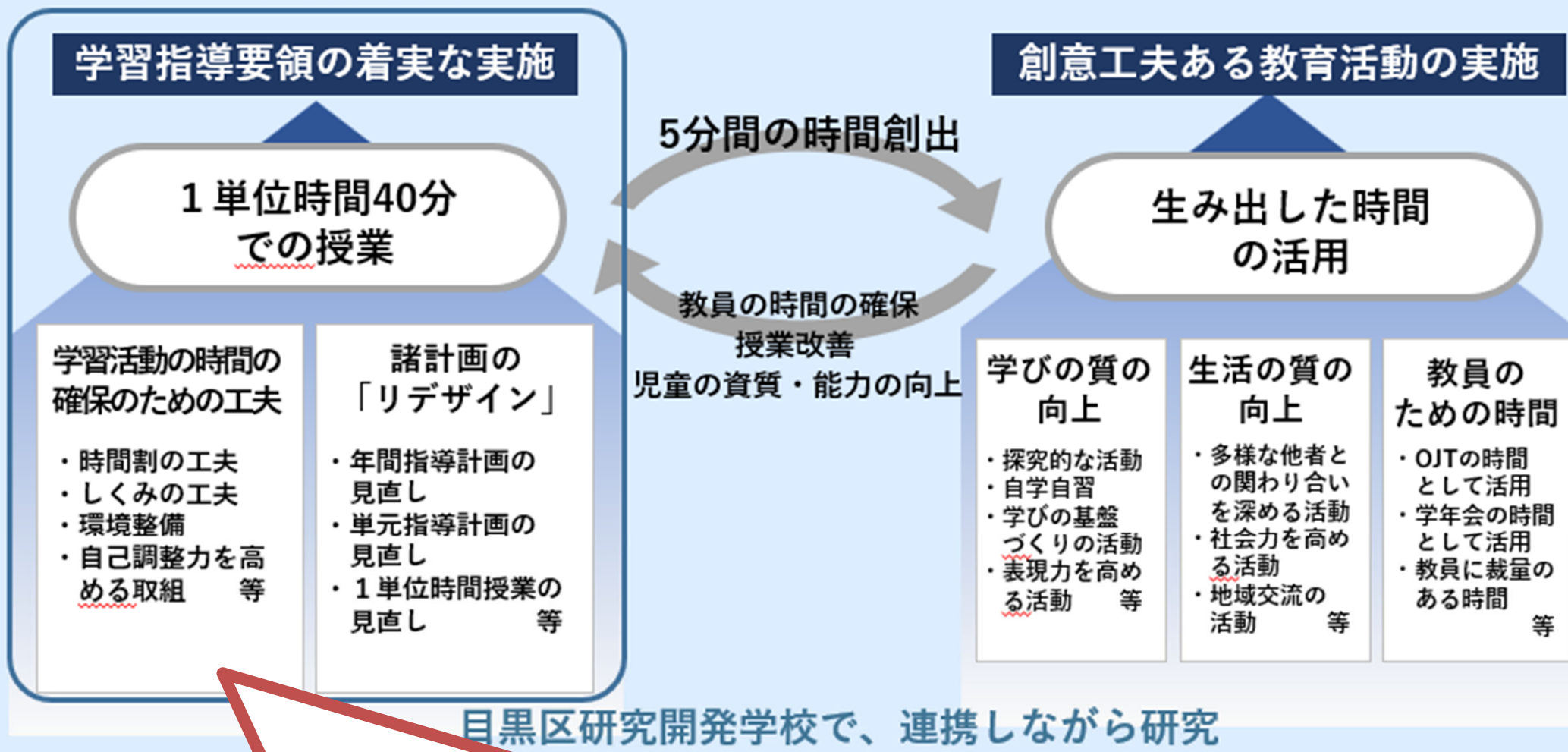
基調講演・中目黒版単元内
自由進度学習の検討

教材研究・教材準備
「学びの手引き」作成



01 目黒区研究開発の概要

目黒区の研究構想図



先の質問①どうやって先生方の理解を得たのでしょうか？
(そもそものモチベーションは?)

東京学芸大学附属世田谷小学校

学びを自分でデザインするための教育課程



デザイン実践の場

Laboratory

学びの「ビジョン」に迫る道筋を
「自分」でデザイン



Home

「誰にとっても良い」ことを
「みんな」でデザイン

よりよく生きる

探究のサイクル

多様な在り方

Class

デザインの実践に向けて、文化・科学の叡智から世界の見方・考え方を広げる
⇒子どもの経験世界を広げ、「デザイン」につなげる

Home 生活をデザインする



個々の違いがよく見える

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:20~9:00	Home	Home	Class	Home	Home
10分					
9:10~9:50	Class	Class	Class	Class	Class
10:00~10:40	Class	Class	Class	Class	Class
10:40~11:00					
11:00~11:40	Class	Class	Class	Class	Class
11:50~12:30	Class	Class	Class	Class	Class
12:30~13:50	Home	Home	Classで弁当	Home	Home
14:00~14:40	Class(2~6年)	Laboratory		Class(3~6年)	Laboratory
14:50~15:30	子ども会議	Laboratory		Class(3~6年)	Laboratory
最終下校	14時45分	15時35分		15時35分	15時35分

Homeで大事にする考え

- 1 年れいや性別などをこえて、みんなであつていく
- 2 「自分にとってよいこと」が「他人にとってもよいこと」であるか話し合つて決める
- 3 自分と自分以外のすべての人のことを考える
- 4 約束は、よりよいものに向けて新しくしていくことができる

先の質問①なぜ40分1コマにしたのでしょうか？



本研究の今後

<成果>

子どもの言動、教員の実感、各種アンケートでも課題解決への前向きな要素が見られた

<課題>

Laboratoryの評価とClassの在り方、Homeの目的と活動の精選
学校リソース配分の適正化

<今後>

- ・教育課程特例校（申請中）として3領域の教育課程を継続予定
- ・Laboratoryは総合的な学習の時間、Homeは特別活動
Classは学習指導要領に。それぞれを精緻化していく
→一般化や公立学校へへの還元を図る

先の質問④学習指導要領の改訂にあたって、
リクエストしたいことは何でしょうか？

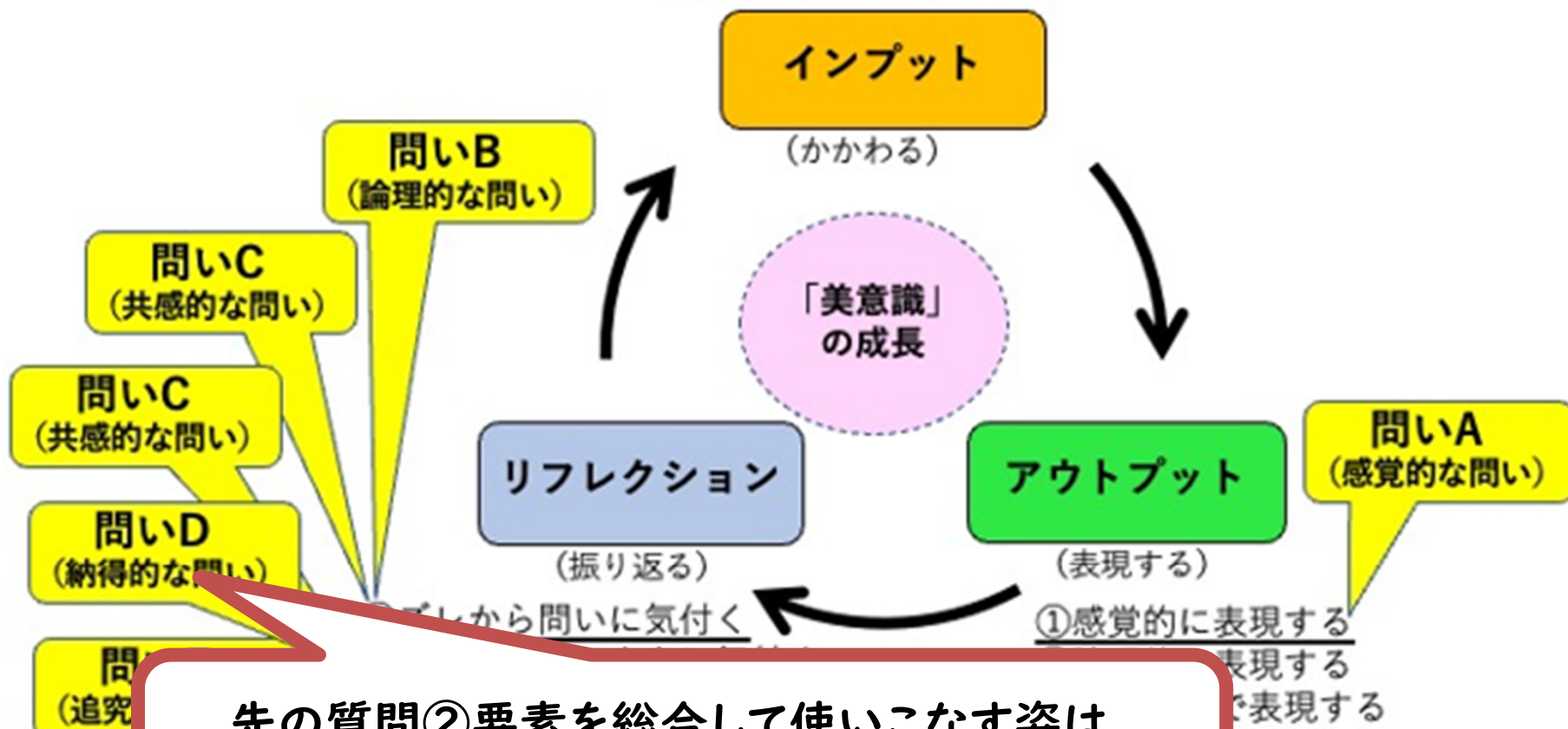
筑波大学附属小学校

筑波版『「美意識」を育む図形カリキュラム』

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
平行 ・移動を捉える ・等距離を捉える ・関係(辺、面)を捉えるetc				垂直・平行	図形の角の大きさの和	拡大図・縮図
直角・垂直 ・直角三角形(長方形)を捉える ・距離を捉える ・関係(辺、面)を捉えるetc		直角三角形・長方形・正方形	正三角形・二等辺三角形と角	平行四辺形・台形・ひし形	角柱・円柱	柱体の体積
合同 ・基準の形を捉える ・対応(点、線)を捉えるetc	色板あそび・身の回りの形	はこのかたち		直方体・立方体	体積	図形の活用問題
対称 ・回転を捉える ・軸を捉える ・中心を捉える ・移動を捉える ・等距離(点、線)を捉えるetc			角の大きさ	長方形、正方形の面積	合同な図形	円柱・円柱
円 ・中心を捉える ・基準の形(二等辺三角形)を捉える ・等距離(中心)を捉えるetc		円・球		正多角形・円周		柱体の体積
						円柱・円柱
						線対称・点対称
						円の面積
						拡大図・縮図

(4) 授業での子どもの「問い」の深化の事実から 読みの系統を検討

- ①言葉に感覚的にかかわる
- ②言葉に論理的にかかわる
- ③言語生活にかかわる



先の質問②要素を総合して使いこなす姿は、
捉えられたでしょうか？

MAGINE THE FUTURE.



◆今後に向けて・・・

◎2017・2018年改訂学習指導要領の方向性

学習指導要領改訂の方向性

新しい時代に必要な資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「社会に開かれた教育課程」の実現
各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

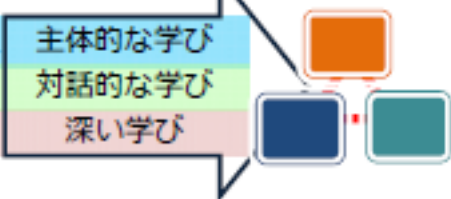
どのように学ぶか

新しい時代に必要な資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す
学習内容の削減は行わない

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善



※高校教育については、従来の学業的知識の暗記が大学入学選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

（中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」2016年12月21日）

◎スタンダードの 作り方

期待される
パフォーマンス
(「科学的・工学的実践」、
「学問上の核となる観念」、
「領域横断的な概念」を
総合して、力を発揮する姿)

(大貫守『アメリカにおける科学
教育カリキュラム論の変遷——
科学的探究から科学的実践へ
の展開』日本標準、2023年)

2-PS1 物質の構造と性質		
理解を示す児童ができること： 2-PS1-1. 観察可能な特徴によって異なる種類の素材を分類・記述するための調査を計画・指揮する。 (記述の明確化：観察は色や手触り、硬さや柔らかさを含む。 パターンは異なった素材が共有している同様の特徴を含む) 2-PS1-2. 本来の目的に最も合う性質をもった素材を決定するために、異なった素材を検証したことで得たデータを分析する。 (記述の明確化：性質に関する例としては、強度、柔らかさ、硬さ、手触り、吸水性を含む) (評価の境界線：量的な測定の評価は長さに限られる)		
上記の期待されるパフォーマンスは、NRCの「幼稚園から第12級までの科学教育」から得られた以下の要素を使用することによって達成させられる。		
科学的・工学的実践	学問上の核となる観念	領域横断的な概念
調査を計画し実行する ・K-2において、問いに答えるための解決策を検証するため、または問いに答えるための調査の計画と実行をすることは、既有経験に立脚し、説明を支持または解決策をデザインするためのデータを提供する公平な検証にもとづく単純な調査をすることへと進む。 ・問いに答えるための基礎となる証拠として役立つデータを生産するために協働的に調査を計画・指揮する。(2-PS1-1)	PS1.A: 物質の構造と性質 ・異なった種類の物質が存在し、そしてそれらの多くは温度に依存して固体や液体のどちらかの状態である。物質は、それらの観察可能な性質によって分類や記述がなされる。(2-PS1-1) ・異なった性質は異なった目的に適合している。(2-PS1-2)	パターン ・自然界や人間がデザインした世界におけるパターンは観察可能である。(2-PS1-1) 原因と結果 ・原因についての生徒の考えを否定もしくは支持するための証拠を集めるように簡単な実験がデザインされる。(2-PS1-2)
データの分析と解釈 ・K-2において、データを分析することは既有経験に立脚し、観察したことを収集・記録・共有することへと進む。 ・物体や道具が意図した形で作用して		工学やテクノロジーや 応用科学への結合 社会と自然界における 工学・テクノロジー・ 科学の影響